

身近な樹木を使用した木の箱の製作 ～木の生命感を表現して、暮らしに癒やしを～

森と木のクリエイター科 木工専攻 中西 靖子

1. 研究背景・きっかけ

前職では、病院の人工的な環境の中で勤務をしていた。そこで人には自然が感じられる要素がもっと必要であると感じた。また、長期に療養をされている方の身の回りには、「その人らしさ」を表現できるようなものが少ないため、例えばその方が大切にしているものをしまう木の箱や薬ケースなどがあれば、「その人らしさ」を表現できるアイテムの一つになり得るのではないかと考えた。

さらに、2022 年夏に美濃加茂市民ミュージアムで企画された「ハコ展一箱膳から『ハコモノ』まで一」を見学し、木製の箱には、ものを大切にしまう効果があると実感した。

そこで、自然とのつながりが感じられる、身近な樹木を使用して、物をしまう木の箱を製作し、使ってもらうことで、人の気持ちや物を大切にすることを暮らしに貢献できるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

木の箱に対するニーズやイメージについて探求する。製作した木の箱を実際に使用してもらったり、意見や評価をもらうことで、ニーズと製作の意図が合致しているのかを確認する。人に癒やしを与え、ものを大切にすることを育むことができる物づくりを行う。

3. 方法

文献や、「ハコ展」を企画された学芸員さんに木の箱についてのお話を伺うことで、木の箱の役割や効果について探る。

木の箱の現在の使用状況やイメージ、要望についてのアンケートを実施。

河川整備や森林整備で出た身近な樹木を使用して、木の箱を製作、展示する。実際に使用してもらうことで、自然を感じられる素材としての木の箱の効果について確認をする。

自然を感じる機会が少ない環境として、医療や治療の場があると思う。今回は病院からもらった薬を、自宅で整理する木の箱を製作して、望んだ効果が得られそうか、医療の現場で働いている方や療養をされている方から、意見や評価をいただく。

4. 調査と考察

①聞き取り・文献より 美濃加茂市民ミュージアム学芸員、藤島夢花さん・岩屋孝志さんからの「ハコ展」についてのお話や、郷家忠臣著「箱—工芸文化史の断層」の文献から、箱は人の生活、人生と深い関わりがあり、中に入っているものを

大切に守る役割があり、また物をしまう箱そのものにも、心をそのまま表現する、という機能がある、ということが分かった。そのため、ものを大切に扱う箱が身近にあることは、人の生活、人生を大切にすることにつながると考えられる。

②木の箱についての意識のアンケート調査を実施。6月にアカデミー在学学生、教職員、竹細工教室参加者、知人などに約 120 通を配布し、76 通の回答を得た。その結果、6 割の人が木の箱を使用している、と回答し、実用的なものが多い様子であった。よかった理由としては、木の風合いや質感が感じられること、愛着がもてることが上位に挙げられた。また、気になる点には「取り扱いに気をつかう」という意見が多かった。このことから、木の箱には、実用性や、木の質感・風合いが感じられることが必要であり、手入れに気を使わずに使用できる製品が求められていると言える。また、使用していない理由では、「身近に木の箱や入れものがなかったから」という理由が多かったが、そのうちの 8 割の方は、今後使ってみたい木の箱や入れものについて、何らかの希望を記入して下さっていた。今後の改善次第で、需要を増やすことができるという可能性を感じた。

5. 実践

①木の箱を製作するにあたり、人を癒やして元気づける効果を高めるため、森の生きている木とのつながりが感じられる製品を作りたいと考えた。今回は演習林の整備や河川整備などからの材、飛騨漆の森プロジェクトよりいただいた、掻き終えたウルシノキの丸太などを使用した。これらの材は、普通に流通している節などが少ない材よりも、木の生命感が現れているように思う。学校内の簡易製材機などで製材し、学内の樹木乾燥用のビニールハウスやオーブンで乾燥し、製作に使用した。



製材の様子

②製作-1、2 と展示 商品化の授業として、

ウルシノキを用いた挽き曲げのお弁当箱を製作した。余り流通をしていないウルシノキの材としての面白さもあり、ウルシを栽培している山の樹木とのつながりを表現することができた。



ウルシノキのお弁当箱

また11月の翔楓祭の企画で、春に集めた木材9種を用いて、長方形の小箱と六角形の箱を計14個製作し、展示を行った。そして、展示時と2ヶ月後のアンケートに回答をいただくことを条件に、小箱をお渡しした。展示の工夫としては、見学者に樹木が生きていたことを実感していただけるように、製材前の木の写真と、樹木の生態や特徴についての説明を記載したパネルを木の箱と一緒に展示した。

展示時のアンケートの結果では、「森・樹木が感じられる」「愛着がもてる」「大切なものを感じたい」など、製作時に意図した回答を得ることができた。また、使用して2か月目のアンケート結果では、「箱を目にするだけで、気持ちがほっこりした。小物の出し入れが、楽しくなった。」

「木箱に入れることでより大切に感じられる。」などの意見が聞かれた。また木の小箱を使用することで得られる効果として、「癒やしが得られる」ことが、5段階中、4と5の回答で91%、「自然を感じる」は82%、「ものを大切にしようと思える」ことが100%であった。(アンケート回答率14通中11通)このような小箱の希望購入代金としては、3000円程度の意見が多かったが、1500円、5000円との回答もあった。

③製作-3。治療や療養の場で使用することができる木の箱として、病院で処方してもらった薬を分かりやすく保管できる薬整理箱をデザインし、製作をすることとした。きっかけは、訪問看護師さんや療養施設の勤務経験のある看護師さんから、自宅療養をされている人は、薬の整理として、お菓子の箱や百円均一で購入したプラスチックの箱を使っていることが多い。それでは味気なくなりがちなため、木の風合いや温かみの感じられる箱がほしい、との声を聞いたからである。

また私自身の周囲での薬の保管方法の聞き取りでも、病院でもらった薬は、保管する場所がはっきりとせず雑然としがち、という意見が多かった。

さらに、高齢の方は薬を日常的に服用されることが多いが、一日分を自己管理できるようなケースがあれば、飲み忘れを予防したり、自己管理ができるため、日常生活動作能力(ADL)の低下を防ぐことができるのでは、というお話も訪問看護師さんから聞いた。これらの意見を参考に、おもに春に集めた木材を用いて薬整理ケースを3種製作し、総合在宅医療クリニックみのの職員の方や美濃市地域包括支援センターの利用者の方に評価をいただいた。木のものだと目に入っても癒やされるし触り心地もよい、木の重さは、薬箱として丁度よい等と、素材について高評価を得たが、形状については、浅いトレイのものだと、場合によっては滑って別の薬と混ざって飲み間違えてしまいそう、という意見もあり、使い手に合わせてさらに工夫を行っていく必要性を感じた。



薬整理箱の一例

5. まとめ

お弁当箱、小物入れ、薬整理箱という木の箱づくりを通して、「自然が感じられる」、「愛着が感じられる」、「ものを大切にしようと思える」という思いを手にとった方に感じてもらう事ができた。しかし、いくつかの課題も見えてきた。

ひとつはコスト面での問題である。実際にかかった時間も含めた費用と、使う人の希望する価格との間に乖離があった。その差を埋めるためには、使い手のニーズをより細かく把握して、魅力的な製品を作ること、意匠の工夫や技術の向上により、価格が高くても買いたいと思ってもらえるような製品を作ること、また時間をかけすぎずに作ることができるよう、作業スピードの改善も必要である。これらの工夫を通して、木の箱をもっと使ってもらえるようにしたい。

また、今回は身近な樹木を製材・乾燥して製作を行ったが、小径木を使用したことで心材、辺材、節、年輪などの一本の樹木の特徴が少ない面積の中に現れ、木の生命感を表現することができたと思う。手間はかかるが、生きている樹木とのつながりが感じられる材として、今後も積極的に使用して行きたい。